第３分科会　　特色あるＰＴＡ活動

《テーマ》　障がい種を超えた交流によるＰＴＡ活動の活性化

Ⅰ　発表の概要

＜発表１＞　（鳥取県　中国・四国ブロック）

発表者　　鳥取県立米子養護学校　ＰＴＡ会長　松下弘美

テーマ　　障がい種を超えたＰＴＡの連携

～ＰＴＡが主体となって取り組んだ就労促進セミナー～

１　本校の概要

本校は平成 23 年度５月１日現在で小学部 47 名、中学部 51 名、高等部 137 名、合計 235 名の児童生徒が在籍している。鳥取県は全国で一番人口が少なく、就労先企業も少なく、障がい者雇用も厳しいのが現状である。

障がい者就労促進について、障がい種の違う皆生養護学校（肢体不自由）、鳥取聾学校ひまわり分校との協力により、企業・当事者・保護者などへの啓発に取り組んだ。企業・当事者・支援者など、それぞれの立場から現状や思いを伝え、進化させる機会となった。

２　平成 22 年度鳥取県特別支援学校就労促進セミナー　――― 私たちも働きたい ―――

期日：平成 22 年９月 17 日（金）10 時～16 時

主催：鳥取県立米子養護学校ＰＴＡ

共催：鳥取県立皆生養護学校ＰＴＡと鳥取聾学校ひまわり分校

後援：鳥取県教育委員会と鳥取県特別支援学校ＰＴＡ連会

日程：

（１）学校紹介

（２）学習公開

県立米子養護学校高等部、県立皆生養護学校高等部

（３）障がい者雇用制度と支援について説明および情報提供

鳥取県職業センター、米子ハローワーク

昼食・昼休憩には県立米子養護学校高等部による

合唱発表

（４）生徒の意見発表（５名）

（５）パネルディスカッション①

働いている卒業生から２名、働いている卒業生の

保護者から２名

コーディネーター（県立皆生養護学校と県立米子

養護学校の進路担当教員）

（６）パネルディスカッション②　～障がい者雇用をめぐって～

皆生養護学校卒業生を雇用している企業

米子養護学校卒業生雇用を検討している企業

コーディネーター（県立米子養護学校元ＰＴＡ

副会長と皆生養護学校前ＰＴＡ会長）

（７）意見交換

参加人数（人）

企業	就労支援事業所	行政	保護者	一般	生徒	教職員	PTAスタッフ	パネラーなど	他学校職員
10	5	13	23	5	140	68	61	10	6

３　課題

〇小・中学部の保護者にも就労に対する意識を促す工夫が必要。
〇セミナー内容の絞り込み・・・時間のコンパクト化も思慮に。
〇予算がない来年度以後の取り組み方

４　成果

〇多くの方がスタッフとして関わり役割分担など綿密に準備することで、当日はスムーズに進行した。達成感を共有することができた。
〇西部地域だけでなく県全域に広報され、企業・保護者・関係者への啓発ができた。
〇生徒が意見発表することで、就労への意欲・願望を伝えることができた。
〇保護者の中に学校に任せきりでなく、「子どもが小さいうちからでも就労についてみんなで考えていかなくてはならない」というやる気が生まれた。

５　その他　ＰＴＡの連携を深める取り組み

〇ＰＴＡ学校間交流

本校と皆生養護学校のＰＴＡの交流。ＰＴＡ執行部と人権教育部を中心として、学校公開日を利用して学校見学、授業参観等交流を行い、お互いの障がい特性を理解しあえるようになった。また、セミナーに向けては分担・協力しながら、参加企業への呼びかけ・職場開拓・企業啓発を行った。今年度も交流活動を実施し、つながりが深まりつつある。

〇ＰＴＡサポート部の新設

卒業後の生活に向けて、在学中かＰＴＡ会員同士のつながりを深め、就労を目指す準備や意欲を高めるとともに、卒後の充実した活動へのサポートを目標に同窓会と連携をとって進化させていきたい。

〇おやじの会設立

父親たちの連携の下、ＰＴＡ組織と協力し合い、もちつき大会、バーベキュー、そうめん流し、校舎の壁塗り等を行った。横のつながりが強化されることによって子どもたちの環境改善が期待される。

〇地域への啓発

◇地域の学校（小・中・高）の人権教育、学校行事等への相互参加
◇地域の教員の人権教育講演
◇中海の清掃等、ボランティア活動

これらの活動はＰＴＡ間の交流を深めたり、地域への啓発活動につながったりしている。

6　おわりに

本会の調査研究事業にＰＴＡとして協力して活動し、味わう達成感は大きいものだと実感しました。活動するメンバーも「みんなで一緒に!!」の意識が高まりました。まだ課題はあるものの、さまざまな立場の方と連携するための重要な場として、進化、拡大、継続を図ってきたと思います。

また、この度の災害で、劣悪な環境の中にあっても、周りの方々からのサポートで落ち着いた生活を過ごしておられる方の話も聞きました。当たり前にある日常が何とありがたいことか・・・。日頃から地域社会との絆を深めることの大切さを痛感しました。そのうえで、個々の保護者が認識を高め、協力し合って、子どもたちを強力にバックアップできる存在になれますように。

＜発表２＞　（長崎県　九州ブロック）

発表者　　長崎県立鶴南特別支援学校　時津分教室

前ＰＴＡ副会長　佐保幸男

テーマ　　盲学校との交流と特別支援学校「情報交換」

1　はじめに

平成 18 年４月に開設された、長崎県立鶴南特別支援学校　時津分教室　小学部は、今年で６年目を迎えました。知的障害の特別支援学校の分教室が、盲学校の敷地内に併設されるということは、全国的にもめずらしく、開設当初はお互いに不安もあったと聞いていました。

盲学校との交流が始まったきっかけは、平成 21 年４月、盲学校の島田校長、盲学校ＰＴＡ長尾会長、時津分教室の柴田主事と分教室ＰＴＡ副会長の私が、盲学校校長室で顔合わせをした折の、「同じ敷地内の学校なので交流してはどうか」という提案でした。まずは、お互いの年間行事予定表を交換し、両校の活動を知り合うというところから、交流をスタートさせました。

2　平成 22 年度の盲学校との交流の取り組み

期　　日	主　　催	交　流　内　容
	1　学　期	
５／19	合　　同	盲学校・時津分教室保護者交流会／除草作業
21	時津分教室	運動会前に出し物を披露
23	鶴南本校	鶴南運動会
６／14	盲学校	文化講座　（点字講座）
22	時津分教室	避難訓練　（火災）
23	時津分教室	青少年劇場
26	盲学校	ふれあいレクレーション　（ゲームラリー・スイカ割り大会）
７／12	時津分教室	音楽鑑賞会　（チェロとピアノ鑑賞）

２　学　期		
９／15	合　　同	盲学校及び時津分教室の学校公開
９／17	合　　同	盲学校・時津分教室保護者交流会／除草作業
26	盲学校	盲学校運動会
11／４	時津分教室	避難訓練　（不審者対策）
12	時津分教室	とぎぶんまつり
14	鶴南本校	かくなんまつり
19	盲学校	芸術体験事業　（人形劇）
12／３	盲学校	文化講座　（フロアバレーボール）
３　学　期		
１／27	時津分教室	進路研修会
２／14	合　　同	盲学校・時津分教室保護者交流会　（反省会等）
17	時津分教室	音楽鑑賞と本の読み聞かせの会

３　障害種を越えた特別支援学校「情報交換会」の取り組み

長崎県特別支援学校ＰＴＡ連合会では、３年前から視覚・聴覚・肢体不自由・病弱の、各特別支援学校ＰＴＡ会長・副会長へ呼びかけて、「情報交換会」を行うようになりました。

平成22年度は、７月・11月の２回「情報交換会」を実施いたしました。

（１）７月13日の「情報交換会」　（長崎県立虹の原特別支援学校会議室にて）

①情報交換会の運営等について

②各校ＰＴＡの自己紹介及び年間活動計画等についての情報交換

③その他の情報交換

※自己紹介と年間活動の報告・説明に、時間がかかり発表できない学校がでてしまいました。

（２）11月５日の「情報交換会」　（長崎県立虹の原特別支援学校会議室にて）

①各校ＰＴＡの自己紹介及び年間活動計画等についての情報交換

②ＰＴＡ活動を活性化するための取り組みについて

③その他

※この回に、前回自己紹介と年間活動の報告・説明ができなかった学校に発表してもらいました。

「情報交換会」では、ＰＴＡ活動を活性化するための、各学校のいろいろな行事や取り組みを聞くことができ、よい情報交換ができました。

これまで、特別支援教育の中でも、違う障害種の学校がどのような活動をされているのかということについては、なかなか伝わりにくい状況でした。この情報交換会を通じて、『まずは、お互いを知る』ということの大切さを感じました。

そのほか、以下のようなことが話題となりました。

○ＰＴＡ行事で工夫している点、好評だった取り組みの発表

○各学校のＰＴＡが抱えている課題や参加しやすいＰＴＡ活動の工夫、内容や組織についての発表

○少人数の中での育友会のあり方や役員選出についての情報交換

○各学校の様子や、保護者の学校に対する思いなどの語り合い…など

この、特別支援学校「情報交換会」は、年２回の実施ですが、年々内容が充実してきています。交流の輪も、広がってきています。長崎県の事務局校の呼びかけで始まった「情報交換会」ですが、これから先も続けていくことで、よりよい相互理解の場、さらなる交流のきっかけになると思います。

４　さいごに

「情報交換会」でいろいろな特別支援教育の取り組みを知ることができ、それと同時進行のようなかたちで、盲学校との交流を始められたことは、私たち時津分教室ＰＴＡにとっても、大変意義深いものでした。盲学校と交流を始めて２年目の除草作業では、両校の保護者が一緒に校庭を整備するという連帯感がめばえたように思えました。また、12 月に行われたフロアーバレーボール大会では、プレーをしているうちに、先生方や保護者たちも点数が入るたびにハイタッチで喜ぶなどして、親睦が深まり楽しい一日になりました。今後も、このような交流行事に、両校の先生方や保護者が、１人でも多く参加し、交流が活発になれば、と願っています。

５　発表のまとめ

米子養護学校からは障害種を超えた PTA の連携ということで、親としては一番心配な就労を促進する活動の発表がありました。他にも、PTA 学校間交流、PTA サポート部の新設、親父の会の設立、地域への啓発など、興味ある活動が発表されました。全知Ｐ連の人脈をつなげて、全国にネットワークを広げて障害者でも納税者になり、有意義なサポートを受けながら自立した生活をという子どもへの未来の力強いサポートを感じる発表でした。

鶴南特別支援学校からは、盲学校と同じ敷地内に併設された鶴南特別支援学校時津分教室だからできる盲学校との交流の取り組み、また障害種を超えた情報交換会の取り組みを発表していただきました。普通の社会の中でも同じことが言えると思うが、まずはお互いを知ることが交流の第一歩だというとても良い発表でした。

Ⅱ　質疑・応答

質問①－１

香川県でも９校であるが、障害種を越えて研修会等を行っている。そこで課題になるが、意見交換などの時間が足りないということだ。自己紹介程度でなかなか交流ができない。時間もかかるので今年からは自己紹介は省いて、事前に打ち合わせを行い、資料を作り読んでいただいてから研修会をしている。いつも課題が残るが、学校間、

あるいは障害種別間でお互いの理解が足りず、足並みがそろわないことがある。県下で活動したときにどのようにコミュニケーションを取って交流を深めていったのかということと、どのように交流会を進めていっているのかを教えて欲しい。

また、米子養護学校では就労セミナーを行っているとのことだったが、香川でも中小企業のほうから障害についての理解を深めたいとの打診があったが、学校によっては一般就労が難しい生徒もいるので学校内で足並みがそろわないことがある。どのように話を進めていったのか教えて欲しい。

応答①－１－１

情報交換会ですが、長崎も苦戦している。1年目も反省をして終わりになってしまい、自己紹介を省くことを検討しているところだ。会長の話で、情報を交換できているが、「もっと知りたい、時間がない」ということが長崎の情報交換会の課題であるとのことだった。良いことと悪いこと、どうでもいいことを話す学校もあれば、話が長い学校もあるので、時間を厳守をしてやろうかと検討している。話が短すぎても分かりにくいが、長くてもわかりにくいと会に出て実感した。長崎で情報交換会が始まってまだ３年なので、もっと長くやっている学校があれば教えて欲しい。

応答①－１－２

一言で言えばざっくりばっさりではないかと思う。自分が自分がとどこの学校もなりがちではないか。作ったきっかけが、行政に対して要望書を出すためで、その取りまとめをしましょうということが始まりだった。そこの会に来るまでは、学校ごとに話をつめてきてくださいと事前に話があったので、自己紹介はしなかった。言いたいことを集約しますが、長いときにはリーダー校が時間になればばっさり切る。基本的にお願いしたいのは、障害種が違うと「関係ないわ」とどうしてもなりやすいが、自分たちのことではなくて、「わが子たち」という括りで考えて欲しい。私たちの障害では関係ないよと言うところでは考えないでくださいということをお願いながらやっている。そして、一番は、個人個人、人と人としてそれぞれの学校の個人として、お父さんお母さんとして、気持ちが伝えられるような、「お互い様よ」とか「助け合いましょう」とか「ありがとう」とかお互いに言えるような気配りがうまくいく秘訣ではないか。今も、障害種の違うよその学校から激励のメールが来ているが、個人個人のつながりが大切ではないか。

就労セミナーの取り組みについては、鳥取県は東部、西部、中部という３つに分かれているが大きな会を全部でしましょうというのはなかなか難しいので、持ち回りでやっている。就労セミナーについては、まだ西部でしか取り組んでいない。我が校から始めて、地域的にまずは近くの学校から広めていきたいとの考えだ。「お互い様よ」という気持ちで接していくと、思いが伝わっていくのではないかと思う。学校が違っても一緒にランチをするなど小さなところからはじめることが大切だと思う。重い肢体不自由児の保護者は就労セミナーに参加しても仕方がないと思っている方もいるかもしれないが、そこはぐっとこらえていただいて、全体の障害児としてのくくりで温かくとらえてくださって努力をしてくださっている。

応答①－１－３

京都には一同に会する会議として、府立学校約 56 校の中の特別支援学校 11 校で、年に一回「ふれあい心のステーション」というものを行っている。支援学校の子どもの作品を大丸京都店で展示させていただくという内容です。その前に 11 校の PTA の会長

が会議をして、今年の支援学校の現状と課題を事前に資料を配布した資料をもとに自分の学校の特色などを情報交換したり、府教委と懇談会をしたりして現状と課題について話し合っていくということをしている。事前に配布物を用意することでスムーズに情報交換ができるので、非常に効果的ではないかと思う。９月７日にやるので、もしよかったら寄って欲しい。一般の方々への啓発にもなるし、その場で作品が買える。

質問①－２

親父の会、設立の秘訣を教えて欲しい。準備を始めていますが中々進められないので、秘訣があったら教えて欲しい。

応答①－２

親父の会を作りたいという話をしたとき、先生からは無理だといわれた。でも、「お父さんがＰＴＡ活動に来てくれたらプラスではないの？強行しましょう！」と飲み会を呼びかけた。先生方は少ないだろうと思っていたようだが、ふたを開けてみたら、40人の参加者が集まった。振り返って色々考えると、ＰＴＡ活動は楽しそうだなという空気をお父さんたちが感じ取っていたのではないかなと思う。いつもお父さんたちは、お母さんの後ろに隠れがちですが、お父さん同士が集まると話が進むのではないか。ですから、一回立ち上がったら、お母さんは参加しないほうが良いと思う。お父さん方だけで話をすることで、色々と策を練ることができるのではないか。ＰＴＡのなかに入れるのではなく、寄り添ってもらうスタンスが大切。お父さんのただの愚痴会かもしれないが。

質問①－３

昨年、米子養護学校にお邪魔して先生方とお話させていただき、会長さんの話を伺った。とっても活発に活動されているＰＴＡだということも伺った。あいサポートは県で行っている事業だそうだが、本当に鳥取県が活発で感銘を受けた。バッチはどういう場所においてあって、どのくらい広まっているのか。

応答①－３

何人の方が持っているかと言うことは分からないが、行政の人はほとんどがつけている。自ら声を挙げると、例えば学校単位、企業単位で研修を受けたいと県の方に話をすると、講習を受けられるし、個人単位でも意志があればもらえる。まだまだこれからの事業だが、何かしらアピールするチャンスがあれば私たちも協力してアピールしていきたい。子どもたちにとっても困ったときの目印になり、これを持っている人なら安心なんだよと教えていける。ちょっとずつ、ちょっとずつという段階だ。

質問①－４

できれば、ノーマライゼーションではないですがあいサポートのようなものを小さな子ども、小学校ですとか中学校、高校など子どもたちの世代にもわかっていただけるようにどんどん活動していただければなと思っている。

応答①－５

子ども達に読み聞かせをするような機会があるときには、あいサポートのことも一緒に話をしている。

質問①－６

PTA サポート部の新設についてだが、学校に在学中のつながりを切らずに卒業してもお母さんたちがつながっていて魅力的だと感じた。つながりの作り方を教えて欲しい。

応答①－６

まだつなげようとしている段階だ。２年目に入ったところだ。同窓会という組織はあったが、１回お金を徴収するだけなので郵便物の郵送だけでお金がかかり、活動が出来ないという現実があった。だから、経済的にもどうにかしなくてはいけないというところで、まずは、高等部になったら、同窓会費を 1000 円ずつ積み立てるように規約を変え、総会で認証してもらった。すべてのことはお金がないとできないのでまずはお金を確保したところからの始まりだ。あとは同窓会の皆さんがやっているスポーツ活動とかお勉強会のようなところにつながるようなことをしていきましょうというところで、在学中から行く道であるという心構えをもってもらえるように呼びかけ、意識付けを高めていった。例えば、親が孤立してしまうときなど窓口となってサポートできるような環境を作っていった。

Ⅲ　指導・助言

＜利根沼田障害者相談支援センター

所長　仲丸　守彦＞

２校の発表をお聞きし、とても勉強になりました。福祉の現場で働いていて思うことは、自分の狭いフィールドの福祉関係者としか関わらないということです。福祉関係者以外の人とやりとりをする機会がなかなかありません。保護者の方々も、自分のフィールドから一歩踏み出し、行政の人たち、障がい種が違う学校の人たちなどと関係をもつことが大切だと感じました。

私は、もともと知的障がい者の施設の職員です。通所、入所の施設で 16～17 年現場で支援員をし、その後相談員になり 10 年目になります。今は知的障がいの方のほかに身体障がい・精神障がい・発達障がい・高次脳機能障がいなど、様々な方の相談を受けていますが、相談員になった当初は知的障がいのことしかわかりませんでした。初めの頃心配だったのは、精神障がいの方の相談でした。統合失調症とはどの様な症状だろう、どの様に相談を受けたら良いのだろう…。それは、統合失調症のことをよく知らなかったからです。統合失調症がどの様な病気で、どの様な生活の苦手さがあるのかを知らなかったからです。地域の方々からすると、「障がい者の得手・不得手等の特性がわからないので関われない」という現実もあるように思います。

就労についても、企業側から学校側へ働きかけることはほとんどありませんから、自分たちのフィールドだけで考えず、実習に行ったり、今回の発表のように企業の人にこちらのフィールドに来てもらうなど、障がいの特性等を知ってもらう機会づくりも必要でしょうし、また、別の養護学校の人たちへ声をかける、母親だけでなく父親にも声をかけるなど、自分たちから働きかけて様々な関係者が集まりやすい環境をつくる仕掛けが大切だと思います。

例えば、「こうなったらいいな」というイメージをつくります。そして、現状が望ましい状態になるには「具体的に何が必要か」ということを考えます。ＰＴＡとして父親の参加が少ない、他の学校との交流が少ない、就労の場が少ないという状況があるとしたら、何が足りなくて何が必要なのかを「具体的」に考えます。「こうなったらいいな」という希望

だけで終わらせてしまうのではなく、現状と望ましい状態の差を見つけて、その差を具体的に埋めていくことが必要だと思います。その視点を皆さんに持っていただき、ＰＴＡ・教員・行政等皆で進めていくことが大切でしょう。

２校とも、具体的な取り組みを熱心に、楽しそうに行っています。こうした活動に「楽しそうに」はとても大切なことです。「朱に交われば赤くなる」という言葉があります。それは、「朱」に関わった人が「赤くなる」、「同じようになる」ということですが、「赤くなれない」ことも多々あります。それは、「朱」の人のその立場や世界を知らないことが原因とも考えられます。相談員という立場で、保護者の皆様に頑張っていただきたいとお願いするのは本当はおかしなことですが、皆さんがそれぞれの地域で「朱」になって、「朱」を広めて地域を「赤く」していただきたいと思います。皆さんの取り組み、大変さ、こんなサービスが欲しい…、こうした想いを地域に発信し、それらを解決する具体的なものを地域として考えていくプロセスが大切です。

群馬県には「地域生活支援ネットワーク会議」というものがあります。県内を４つのブロックに分け、保護者が日頃疑問に感じていることや心配事を事前に調査し、保護者・教員・行政・相談員などが集まって情報交換を行い、会議のときに関係機関より回答する。各種の疑問などを解決しながら、障がい者やその家族が地域でより生活しやすくすることを目的とした会議です。福祉制度や行政の世界は、なかなかわかりにくいものです。相談員は何をしてくれるのか、行政は何をしてくれるのか、そう言ったことを知っておくことも大切です。県立榛名養護学校の沼田分校では、毎年６月に地域５市町村の障害福祉担当者等を招き、制度の説明会を行っています。そのような場に出席し、様々な相談場所があるということを知っておくことも大切です。学校を卒業すると先生との繋がりが薄くなってしまいますので、学校以外の相談場所をお子さんが小さい頃から知っておくと良いでしょう。

「地域をつくる」ことは「人をつくる」ことです。障がい者の特性を地域の様々な人たちに知ってもらうこと、また、その家族が何を心配しながら生活をしているかなど、障がい者を理解してもらう取り組みや仕掛けを継続して行い、福祉に関わる人だけでなく障がい者を理解する人をどの様につくっていくかが大切です。そして、介護保険でどの地域にもデイサービス等が設置されたように、障がいの分野においてもサービスを充実させていかなければなりません。

その為に、保護者の皆様に是非「朱」となり、様々なことを地域に発信していただきたいと思います。